

『青葉の森へ—短歌ハーモニー歌集』が刊行されました

このたび、千葉市女性センター（ハーモニープラザ内）を根拠地に活動をしている短歌ハーモニーのメンバーによる合同歌集が出来上がりました。すでに、去る6月15日開催の女性センター「ナイトセミナー・短歌の世界」で前宣伝をしていたものですが、完成いたしました。この小著の成り立ちは「あとがき」の冒頭にも次のように述べています。

「私たちの短歌ハーモニーの会は、二〇〇二年三月、内野光子が担当した千葉市女性センター主催ハーモニーセミナー入門講座「短歌に挑戦」の終了後、受講生の有志の方々が立ち上げた短歌の勉強会です。一〇人前後が毎月第三木曜日に千葉市ハーモニープラザの女性センターに集い、歌会を開き、近現代の歌人たちの作品鑑賞をしています。時には、センターのイベントに参加したり、吟行や展覧会にも出かけたりしました。すでに四六回を数えます。」

また、歌集名につきましては、千葉市女性センターは、四季折々に風情を変える、広大な青葉の森公園の前に位置しています。私たちは、毎月1回、青葉の森公園へと向かい、集いを持つことに由来します。

メンバーの作品の一部を後掲しましたので、ご覧ください。

なお、小著の計画から出来上がるまでの経過をあわせてお伝えしておきたいと思います。一年ほど前に、内野から、担当の方がフロッピーに毎月入力してくださっている歌会詠草をまとめてみたらどうかと提案したことはありました。コピーをホチキスで綴じたような手作りのものを想定していたのです。メンバーには新しい方もいらして、作品も少し足りないようだから、もう少し先にしようという話しになりましたが、お世話役の幾人かが、積極的に動いてくださって、あれよあれよという間に、メンバーの作品各30首余りとエッセイをまとめ、あらためて編集をしてくださいました。初校の段階では、メンバー全員で読みあいながら意見交換もいたしました。用紙・印刷・製本の手配には実行力と機動力を存分に発揮し、各業者の方の理解もいただきました。装丁・レイアウトにつきましては、メンバーの家族の方にも、お仕事の合間に協力いただき、このような形に実りました。完成までの過程も私たちにとりましては、とても大切に思えたのでした。

しかし、まだまだ、いたらぬところが多々あるかと思えます。千葉県近隣の図書館などには備え付けていただけると思えます。率直なご意見と感想をお聞かせいただければ幸いです。

短歌ハーモニー歌集『青葉の森へ』（2006年7月刊）より

大堀静江「花の道」

頂に立ちし日はるか甲斐駒の白き姿のまなかいに見ゆ
有事法ふみ出す一步にふつつと記憶の底の機銃掃射音
ようやくに風邪癒えし身にふきのとうの濃緑冴えて背筋のびゆく

福井直美「未亡人の恋歌」

ふるさとの校舎めぐりて夏日暮れ君の遺骨とグランド一周
君植えし紅きつるばら揺する風わが心辺の窓にそよぎぬ
春も海も線路のその先ひと想う五十路の我も青春切符

佐藤 ふみ子「一会」

ふるさとは無数の桜果てしなく霞となりて天に昇りぬ
さやさやと白き帽子の少女らが集うがごときどくだみの花
大戦中油を採りし松の木に未だ残る深き傷痕

美多賀鼻千世「ボビンレース」

影富士を浮かび上がらせ沈みゆく朱色に染まる幕張の浜
鳴りやまぬ拍手に再び現れる主役のマクベス美声とどろく
「月光」の低きしらべを聞きながら若き特攻の面影浮かぶ

渡辺真佐子「紅色サプリメント」

それからと付け足すはずの前にある沈黙に君の本音ひそみぬ
つらつらと言ひ分け吐きあふる人の目は戦ふための光を持たず
その腹に幾千の蟻あそばせて篠懸大樹は若葉ゆらしぬ

菊池 邦子「薫る四季」

春の日をたっぷり吸いし布団にてこぼさぬようにやさしく仕舞う
看護婦の機敏なふるまい小気味よき重たき空気はねのけるごと
空港の雰囲気我に緊張をまとわりつかせ出発待たむ

前田絹子「風の名前」

みどりごが歩み初むるをはやされて何処へ続く一步か知れず
風吹きて時は過ぎたり北斎は芥子図に江戸の風留めたり
何処より君は来たれり何処へと吾は行くべし蝸の声

松下寿子 「主婦に乾杯」

蛇のごと力強くて悠然とめだかの大群は今日も生き抜く
たまゆらの白露きらり息ひそめそつと切り取り指輪にしたし
医学とは不可思議なもの薬やめ通院やめたら心身軽く

海保秀子「華髪」

さみだれの片時止みし浜に出づ霧の中よりたちくる波音
受け皿のなき時代の子育て身を削り支へてくれし小父の通夜にゐる
古稀を経てまた歳重ぬ茫茫と忘却の世に棲むわれならむ

内野光子「野に立つ」

白き山めぐれば少年セザンヌの遊びし石切り場までに迫り来
雨来たる敗戦の日にして野に立てば五輪の金も国歌も要らず
入院の兄の見舞いに乗り慣れしバスが広場をめぐりて去りぬ